

〔論 文〕

アジア港市世界におけるポルトガル人－タイでの事例から－

The Portuguese in the Asian Port-Polity World—About the Case in Thailand—

疇 谷 憲 洋

Kurotani Norihiro

この〔ゴア〕市の市民権、プリヴィレージすなわち特^{リベルテイ}権は、結婚してそこに居住する者以外は、なんびともこれを享受することを得ない。かれら〔ポルトガル人の男性〕の間には、ただ二種類の階層があるだけである。すなわち、既婚者と兵士とである。というのは、未婚者たる独身の連中はすべて兵士と呼ばれているからで、それは、人のもちうる最も名誉ある呼称なのである。が、これら兵士には何らの責務もなければ、何がしかの部隊とか連隊とかに服属せねばならぬ義務もない。インディエじゅうにも、そうしたしきたりがないのである。だからポルトガル人らは、ポルトガルからインディエに来るが早いか、それぞれに思い思いの道を行く。

－ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン⁽¹⁾－

はじめに

16世紀前半に形成されたアジアにおけるポルトガルの帝国は、「海の帝国」あるいは「交易拠点帝国」と表現される。ポルトガルの支配が、ゴア、ホルムズ、マラッカといった港湾都市とその周辺に限られ、アメリカのスペイン植民地のような広大な領域を支配するにいたらなかったこと、拠点都市を結ぶ海上交易ルート of 支配を目指していたことは、アジアにおけるポルトガル帝国の特徴として指摘されているとおりである⁽²⁾。こうした海洋帝国の形成とともに、「帝国」の枠組みを越えてアジア各地に拡散していくポルトガル人も多く存在していた。16世紀後半にアジアを訪れたオランダ人リンスホーテンは、その様子を、「それぞれに思い思いの道を行く」と表現している。

ポルトガル海洋帝国をめぐる様々な論考を著しているC. R. ボクサーは、『熱帯におけるポルトガル社会 (Portuguese Society in the Tropics)』において、ゴア、マカオ、バイア、ルアンダといった拠点都市における市参事会の組織や自律性に注目し、リスボン、ポルトといったポルトガル本国の市参事会との関係性・並行性を指摘して、ポルトガル植民地帝国の形態を、港湾都市の関係性からとらえなおそうとしている⁽³⁾。また、「接続された歴史」論で注目されたインド出身の歴史家、サンジャイ・スブラフマニヤムは、『アジアにおけるポルトガル帝国 (The Portuguese Empire in Asia)』の中で、ポルトガル王権とアジアの港市国家との類似性を指摘するなど、当時のアジア世界の文脈の中でポルトガル海洋帝国を把握する試みを行い、アジアにおけるポルトガル人の「拡散」現象や「ポルトガル・アイデンティティ」の問題を検討している。

本稿では、こうした議論を踏まえて、アジアにおける「ポルトガル海洋帝国」について考察するため、16世紀から18世紀にかけて繁栄していた港市国家アユタヤとポルトガル人との関係について検討する。

1. 東南アジア港市世界とポルトガル

(1) 東南アジアの港市世界

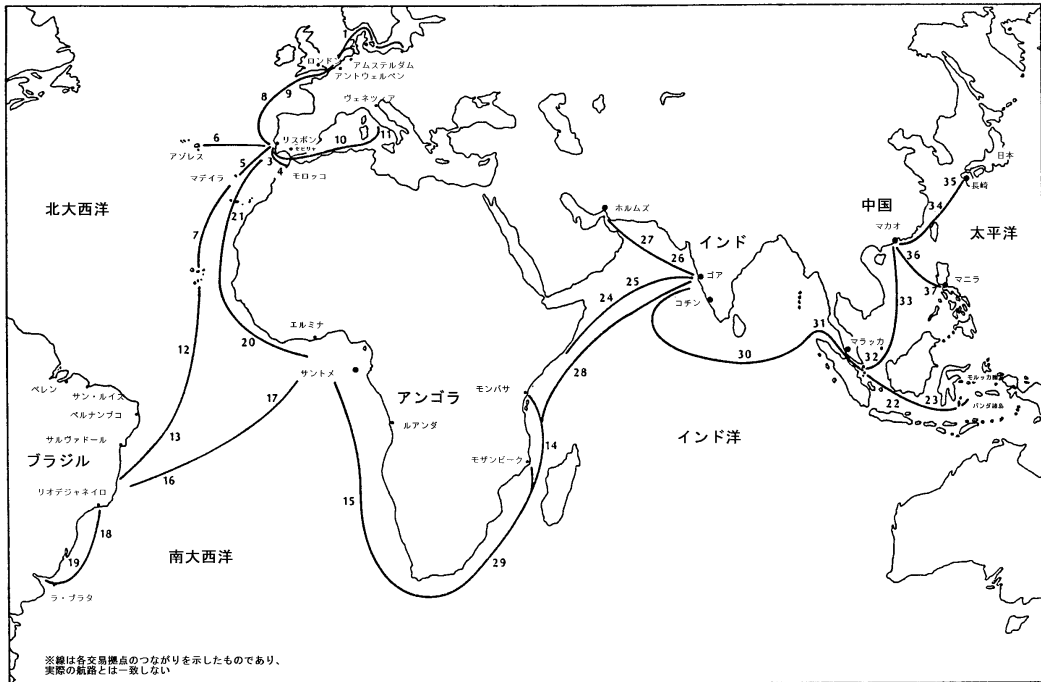
ポルトガルが進出した時期の東南アジアは、15世紀～17世紀の「大交易時代」を迎えていた。東南アジアは、環インド洋世界と環シナ海世界の中間に位置し、東西の交易ルートの結節点として国際商業が繁栄し、マラッカに代表される「港市国家 (Port Polity)」が各地に形成・展開していた⁽⁴⁾。これら港市国家の特徴は、港湾都市の支配を通じて商業に基盤を置く王権が形成され、権力の中心と交易の中心がしばしば重なり合っていたことである。港湾管理や交易統制の部局が国政に重要な位置を占めており、外国人を登用して業務を任せることもあった。アルブケルケによる1511年のマラッカ攻略は、こうした東南アジアの状況に根本的な変革をもたらすものではなく、むしろ、交易の多極化をもたらし、新たな港市国家の発展を見ることになる。

この時期に繁栄した港市国家のひとつとして、シャム (タイ) のアユタヤ朝 (1351年～1767年) がある⁽⁵⁾。チャオプラヤー川流域の都市アユタヤに都を置くタイ人国家である。アユタヤは、河口から80キロメートルの位置にあり、交易船は日数をかけて遡上する必要があったが、海上からの襲撃を受けにくい構造になっていた。また、アユタヤを中心とする現在のタイが、ベンガル湾商業圏と環シナ海商業圏の中間地点に位置しており、周辺地域から米や鹿革、蘇木、安息香など種々の商品を産出することもあって、アユタヤは国際交易港として繁栄していた。交易活動は国王権力によって管理・統制され、その担当大臣であるプラ克蘭 (ポルトガル語ではバルカラン) が重要な地位を占めていた。後述するように、イスラム教徒や中国人など様々な民族・人種が到来し居留区を形成、さらにこうした「外国人」の中から、いわゆる「日本人町」の頭領であった山田長政や、元イギリス東インド会社所属のギリシア人コンスタンス・フォールコンなど、アユタヤ王に重用されるものもいた。

(2) ポルトガル海洋帝国

16世紀以降、大西洋、インド洋、環シナ海世界にまたがる「帝国」を形成したポルトガルは、その拠点間に交易ネットワークを形成する。ポルトガルの帝国全体のネットワークを図式化したものが、図①「ポルトガル海洋帝国における商品の流れ、16世紀～18世紀」である⁽⁶⁾。時代によって、拠点の獲得・喪失や交易品目の変化があるため、あくまでも概略的なものであるが、表①「各拠点間交易の主要商品」をあわせてみると、次のような特徴が見て取れる。ゴアとリスボン間の航路、いわゆる「インド航路」を通じて、リスボンからゴアには、ヨーロッパ産商品や地金、ゴアからリスボンは香辛料をはじめとするアジアの様々な商品が流入している。そして、リスボンからヨーロッパ市場へこれらの商品が流入することによって、ポルトガルは、リスボンを中心としたヨーロッパ・アジア間の中継貿易を行っている。さらに、アジアの拠点間交易に目を移すと、例えばゴア・マラッカ間交易や、マラッカ・マカオ間交易においてみられるように、ポルトガルの拠点間交易

は、ポルトガル人の到来以前に存在していたアジアの地域間交易を引き継いだものであることが分かる。



図① ポルトガル海洋帝国を中心とした商品の流れ 16世紀～18世紀

表① 主要交易商品一覧(部分)		
商業ルート	番号	商品
ポルトガル→西欧	8	染料、香辛料、象牙、砂糖、ワイン、絹、塩、タバコ
西欧→ポルトガル	9	穀物、工業製品、毛織物
ポルトガル→ブラジル	12	オリーブ油、小麦粉、タラ、ワイン、工業製品
ブラジル→ポルトガル	13	ブラジル木、砂糖、タバコ、金、銀、ダイヤモンド
ブラジル→西アフリカ	16	タバコ、金、蒸留酒、皮、馬
西アフリカ→ブラジル	17	奴隷、象牙
西アフリカ→ポルトガル	20	奴隷、象牙、金、コショウ、麝香
ポルトガル→西アフリカ	21	工業製品、金属製品、ガラス玉、トウモロコシ、馬
ゴア→ポルトガル	28	香辛料、絹、綿布、磁器、香木、象牙、宝石
ポルトガル→ゴア	29	地金、銅、ヨーロッパ産商品
ゴア→コチン→マラッカ	30	亜麻布、綿製品、ヨーロッパ産商品、香辛料、象牙
マラッカ→ゴア→コチン	31	金、銅、絹、磁器、麝香、真珠、薬草、日本産商品
マラッカ→マカオ	32	香辛料、皮、ヨーロッパ産商品、インド織物、象牙
マカオ→マラッカ	33	真珠、薬草、磁器、絹、麝香、銀、金、日本産商品
マカオ→長崎	34	ヨーロッパ産商品、金、絹、磁器、麝香
長崎→マカオ	35	日本産銀、漆器、調度品、屏風、武器

A.J.R.Russell-Wood, *The Portuguese Empire, 1415-1808*, より作成
番号は図①の交易ルートに対応している

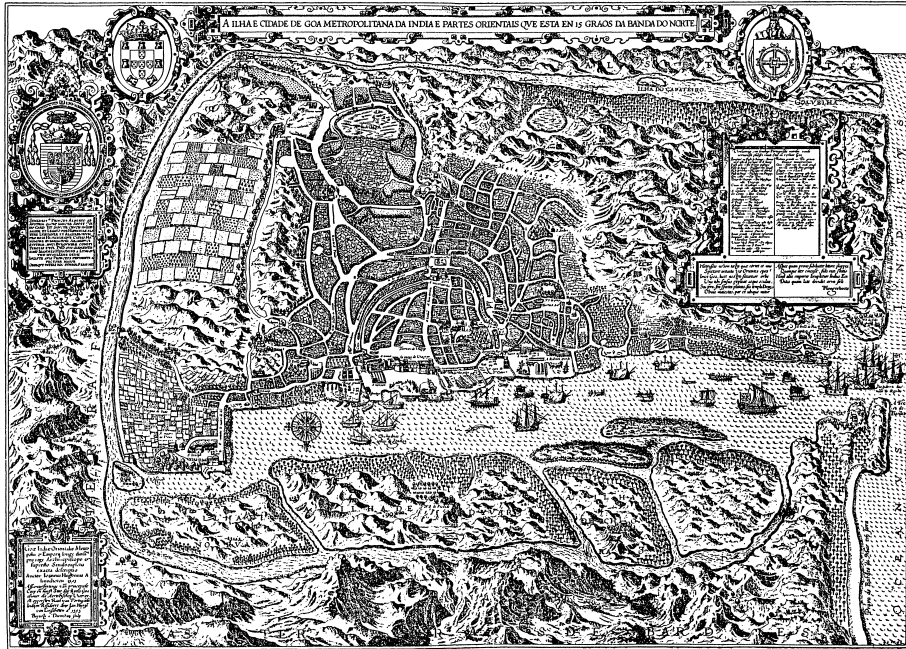
さらに、こうしたネットワークを形成していた港湾都市の例として、リスボンとゴアを見ると、以下のようなことが明らかになる。

図②は16世紀終わりのリスボンを描いた図である。天然の良港たるテージョ川河口に面して都市が形成されていることは一目瞭然であるが、マヌエル1世期には、テージョ川に面した地区に王宮が移り、インド商務院や税関といった部局と隣接することによって、国家権力と国際交易の中心が重なり合う構造となっていることである⁽⁷⁾。これは、先述したアジアの港市国家とも共通する点であり、ポルトガル王権の性格を考える上で興味深い。



図② 16世紀終わり頃のリスボン

図③は、「ポルトガル領インディア」の中心、ゴアである。都市の形態がリスボンのそれと類似している（河川と広場）のが見て取れる。さらに注目すべきは、ゴアの都市としての特権である。ゴアの市参事会の構成や特権は、リスボン市参事会の構成や特権を引き写している。そして、1530年以降、総督（副王）府所在地になったこともあって、ゴアは、ポルトガル領インディアの首都として機能している⁽⁸⁾。さらに、教会も数多く建設され、「ゴアを見たものはリスボンを見る必要がない」とさえ言われていた。このゴアを中心に、ディウやマラッカ、マカオなどの港市が拠点として結びつき、ネットワークを形成しているのが、アジアにおけるポルトガル海洋帝国の姿なのである。



図③ 16世紀後半のゴア

（3）アジア港市世界におけるポルトガル人

アジアのポルトガル海洋帝国を構成したポルトガル人の数については、アジアのそれと比較した際の少なさがよく指摘される。ボクサーは、喜望峰から日本にかけて拡大した帝国における「人手不足」を恒常的な問題として指摘している⁽⁹⁾。スブラフマニヤムは、17世紀前半の年代記作者ボカロの著述や、ポルトガル人歴史家マガリャンイス・ゴディーニョの研究を下敷きに、アジアの拠点都市に定住していたポルトガル人を「カザード・ブランコ（白い既婚者：ポルトガル系市民）」と「カザード・プレート（黒い既婚者：アジア系でキリスト教に改宗した市民）」に分け、1630年代における前者をおよそ6000人と計算している⁽¹⁰⁾。

16世紀後半には、年平均2000人規模のポルトガル人が喜望峰を越えてやってくるのだが、その圧倒的多数は男性であった。そのため、1510年のゴア攻略の際にアルブケルケが命じた集団結婚に見られるように、現地女性との通婚が多く見られ、また、奴隷身分の女性とも交渉をもったため、大規模な混血者層が形成されることになる。スブラフマニヤムは、アジアで活動していたポルトガル人を、以下のように分類している。

まずは、ポルトガルの勢力圏を中心とする「公式な」世界で活動していたグループである。各拠点都市において結婚し、居を構えたポルトガル人は、「カザード（既婚者）」もしくは「モラドール・カザード（既婚住民）」と呼ばれる。彼らは、拠点都市における商工業活動に従事するとともに、市参事会やミゼリコルディアなどの組織を構成し、都市共同体を形成する中核となっている。こうした居住者とならんで重要な存在が「聖職者」、と

りわけ宣教師である。フランシスコ会、ドミニコ会、イエズス会、アウグスチノ会といった修道会に所属する宣教師は、ポルトガル王権の「布教保護権（パドロアード）」の下で、ポルトガル系住民に対する司牧活動や、現地人への布教に従事していた。その一方で、定住しないものの、ポルトガルの公式な世界に属しているものもいる。語義的にはカザードと対置される「ソルテイロ（独身者）」たちである。かれらはまた「シャティン（商人）」とも呼ばれ、各地を行きかう私貿易商人であった。

彼らに対し、ポルトガル本国政府の利益を代表している存在が、植民地官僚と兵士である。副王・総督や各拠点の長官（カピタン）は、原則として三年任期であったが、国家権力を代表・行使する傍らで、職務に付随する特権（艦船の派遣など）によって私服を肥やし、カザードたちの利益と対立することもしばしばであった。「兵士」は、こうした官僚・役人に仕える存在であったが、現地で結婚してカザードになるものもいれば、ポルトガルの支配領域の枠組みを超えて活動するものもいた。

ポルトガルの「公式な」勢力圏の外側で活動するポルトガル人は多く存在した。「反抗者(alevantado)」あるいは「放逐者(lançado)」は、ポルトガル王権の統制を離れたポルトガル人を指す言葉として用いられ、帝国の枠組みの外で活動・定住し、かなり大きなポルトガル人コミュニティを形成するものも現れる。さらに「背教者」と呼ばれる人々がいる。背教者とはキリスト教以外の宗教、とりわけイスラム教への改宗者を指す言葉であったが、アジアにおいては、イスラム教君主に仕えるポルトガル人も、背教者という名前で呼ばれることになる。こうした事例は、ビントやバロスなど同時代の史料にも多く現れており、ポルトガルと対立する勢力に仕えるポルトガル人もかなり存在していた。

以上のようなポルトガル人、あるいはポルトガル系住民が、ポルトガル勢力の拡大や、交易の進展に伴って、アジア各地に拡散してゆく。そうした現象の反映として、17世紀ごろには、ポルトガル語が、この地域の「リングア・フランカ（共通語）」の一つとして機能していた。アユタヤにおいて王の寵臣として重要な地位を占めていたギリシア人官僚コンスタンズ・フォールコンは、タイ語とポルトガル語に通じ、彼が教皇にあてた書簡はポルトガル語で作成されている⁽¹¹⁾。そのころアユタヤへ派遣されたフランス人ショワジも熱心にポルトガル語を学習していることが、彼の道中記から見て取れる⁽¹²⁾。

このように、ポルトガルの「帝国」は、アジア港市国家群に接続し、ユニークな存在となっているのである。

2. アユタヤのポルトガル人

(1) アユタヤ朝とポルトガル

1511年のマラッカ攻略をきっかけに、ポルトガルとアユタヤ朝の関係が開始される。攻囲のさなか、総督アフォンソ・デ・アルブケルケは、ドゥアルテ・フェルナンデスをアユタヤに派遣し、外交関係の樹立を図る。当時のアユタヤ王ラーマティーボディー2世（位1491～1529）は、ビルマやカンボジアなどの隣国との抗争を繰り返している最中であったので、ポルトガルとの同盟にはかなり乗り気であり、マラッカへ返答の使節を派遣した。その後何度か使節がやりとりされ、ポルトガルとアユタヤ朝の関係は強固なものになると思われた。

ところが、こうした動きは、1520年代に失速する。『16世紀シャムにおけるポルトガル人』を著したフローレスによると、理由は以下のとおりである⁽¹³⁾。1515年にアルブケルケに代わって赴任した新総督ロポ・ソアレス・デ・アルベルガリアは、アルブケルケが推進した国家による積極的な拠点の形成や、交易の統制から一步後退し、現地のポルトガル人に活動の自由を与える政策をとり、アユタヤとの関係構築には消極的となる。また、当初はマラッカへの米の供給を期待していたポルトガル人であったが、アユタヤへの航路はマレー半島の先端を回航する必要がある、ビンテン島のイスラム勢力との抗争もあって、むしろパタニやクダーといった、マラッカに比較的近い港市との関係を強化することになる。さらに、16世紀後半には、アユタヤ朝がビルマやペグーとの戦争を通じて弱体化することにより、強力な同盟相手としての魅力も薄れていった。むしろ、ベンガル湾を通じてのインド東岸部との交易の重要性から、マラッカのポルトガル勢力は、ペグーと同盟関係を結ぶことになるのである。結果として、ポルトガルとアユタヤ朝の強固な外交・通商関係は、公式には結ばれなかった。

その後、東南アジアには、16世紀後半からスペイン、16世紀末からはオランダ、イギリスといったヨーロッパ勢力が進出してくる。かれらもまた、東南アジアにおける拠点獲得競争の過程で、国際交易都市アユタヤとの関係を構築しようとつとめる。とりわけ、オランダ東インド会社は、1608年に商館を開設し、アユタヤとの通商を本格化する。さらに東南アジアにおいて勢力を拡大したオランダは、アユタヤ王権に対しても圧力を加える存在となっていく⁽¹⁴⁾。その一方で、ポルトガルは、1641年にマラッカをオランダに奪われるなど、この地域におけるプレゼンスを低下し、いくつかの例外を除けばアユタヤと公式な関係を構築する機会には恵まれなかった。

(2) ポルトガル人居留区の形成

公式な関係が希薄なものとなり、16世紀後半から17世紀にかけてポルトガルのプレゼンスが低下する一方で、アユタヤにポルトガル人居留区が形成される。先述したように、アユタヤには様々な民族が到来し、居留区を形成していた。そうした外国人居留区について、1687年にフランスからアユタヤへ派遣されたラ・ルベールは、以下のように記述している。

既に述べたように、交易の自由が、さまざまな民族に属する外国人をかつては大規模にシャムへと招き入れ、かれらの中には居を定めるものいたが、それは自分たちの習慣に従って暮らし、かれらのいくつもある信仰を公に実践する自由があるからである。こうした民族は、それぞれの街区をもっており、これらの街区は市の外にあって、その郊外となっているのだが、これらの街区をポルトガル人はカンと呼び、シャム人はバーンと呼ぶ。さらに、これらの民族は、それぞれの頭領を選出する。その頭領をシャム人はナーイと呼んでいる。これらの頭領は、自民族のことがらに関して、マンダリンとともに差配するのだが、そのマンダリンは、国王がその目的のために任命し、そしてかれらはその民族のマンダリンと称している。しかし、この上なくささいなことがらでも、このマンダリンによって決定されることなく、バルカロンのもとへ持ち込まれる⁽¹⁵⁾。

このように、アユタヤにおいては、様々な民族が居留区を形成し、一定の自治や信仰の自由が認められていた。各居留区にはそれぞれ長がおかれ、通商・外務担当大臣であるブラクラン（バルカロン）を通じて統制を受けていた。

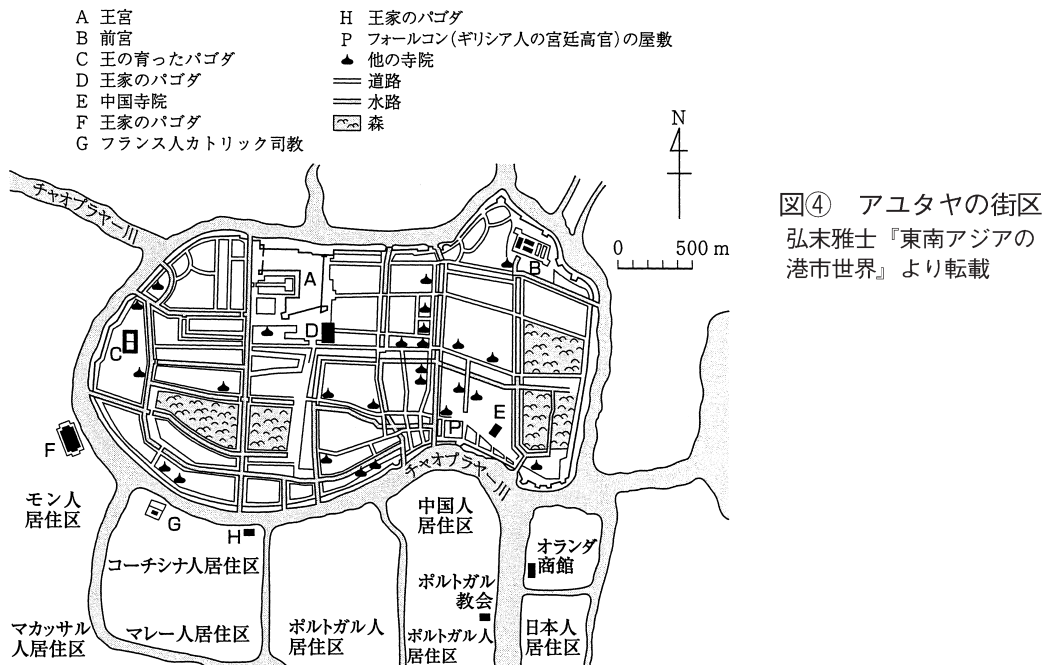
ポルトガル人居留区の起源は、16世紀前半にさかのぼる⁽¹⁶⁾。先述のように、シャムとポルトガルの公式な関係は16世紀半ばには停滞していたのだが、その一方、ポルトガル人の私貿易商人は、こうした状況を利用し、アユタヤを訪れて交易活動を行う。私貿易商人の活動の一方で、ポルトガル人は、アジア諸国、とりわけ東南アジア大陸部において、「傭兵」として現地勢力に仕えていた。アユタヤ朝も、隣国に対抗するため、兵力を必要としており、アユタヤにきたポルトガル人や、他国との戦いで捕虜にしたポルトガル人を、兵士として使用する。チャイラーチャー王（位1534～1547）は、チェンマイ征服その他の機会にポルトガル人兵士を使用する一方、その見返りとして、関税の免除や教会の設立許可といった特権とともに、土地を与える。こうして、アユタヤに最初のポルトガル人居留区が形成される。アユタヤに居留区を形成したポルトガル人は、1569年のビルマ軍侵攻の際、都市の防衛に尽力したが、アユタヤ陥落によって一時的に居留区は壊滅する。その後、独立を回復したナレースエン王（位1590～1605）によって、アユタヤでの居住が認められ、ポルトガル人居留区が再び形成される。

『タイにおけるポルトガル人』を著したマノエル・テイシェイラによれば、ポルトガル人居留区は、「バンデル・ポルトガル」あるいは「バン・フラン（Ban Frang）」と呼称されていたが、この「フラン」とは「フランク」、すなわちアジアの諸王朝がヨーロッパ人を呼ぶときの呼称である⁽¹⁷⁾。17世紀後半にシャムを訪れたフランス人は‘Camp’というフランス語を用いているが、おそらくポルトガル語のCampo（「野、土地」）をフランス語に引き写したのではないかと推察される。

図④は、17世紀後半におけるアユタヤの見取り図である⁽¹⁸⁾。ポルトガル人居留区は、王宮のある島の外にあり、日本人居留区（「アユタヤ日本人町」）と隣り合っている⁽¹⁹⁾。

フォールコンについて詳しい記録を残したイエズス会士ド・ペーズは、そのメモワールの中で、ポルトガル人居留区の様子を以下のように記述している。

ポルトガル人は、取引のために一世紀以上も前にシャム王国にやって来て、そこでいくつかの機会において、シャム王に対して良き奉仕を行ったので、その代わりにポルトガル人は王から都市に隣接した広い土地を拝領し、そこに居を構え、国家に関わるようなことがらを除いてはシャムの判事からは独立し、かれら自身の法と慣習の下で暮らしている。私が間違っていなければ、ポルトガル人がこうした認可を確かなものとしたのは、亡き王（ナーラーイ王）の父王（プラサート・トン王）の先王（ソントム王）からであり、かれは、シャム王国に居住したいと願っているようなポルトガル人のために、特許状によって、この場所をポルトガル王に譲渡した。しかしながら、この場所を城塞化することは禁じられている。かれらがそう呼ぶところの、「カン（居留地）」の入り口に、ポルトガル人は十字架を立てた、その上には、認可の文言が刻まれているのだが、それは、ポルトガル王が獲得した権利の永遠の記念とするためである。それから、その場所にかれらは教区のための教会を二つ建てた、ひとつは、イエズス会神父によって奉仕され、もうひとつはドミニコ会士によって奉仕され



写真①ポルトガル人居留区跡



写真②ポルトガル教会(ドミニコ会)の遺構



写真③ポルトガル系住民の埋葬跡



写真④フランス人カトリック司教の教会跡に建てられた「聖ジョセフ教会」

ている。どちらもかれらの司牧活動をヨーロッパにおけるのと同じ自由さで実行しており、マラッカ司教に従属していて、教会はその管轄の下にある⁽²⁰⁾。

この居留区には、どのくらいのポルトガル人が居住していたのであろうか。前出のラ・ルベールによれば、「シャムには3000ないし4000のムーア人がおり、インディア生まれのポルトガル人も同じくらい多くおり、同じくらい多くの中国人もいる」とあり⁽²¹⁾、1683年に教皇代牧パリュととともに派遣されたニコラス・ジェルヴェーズの記述には、「何年か前にオランダ人と諸インディアで戦った戦争の間、シャムにきたポルトガル人の中には、居住地をここに建設したものもあり、その数はおよそ700から800家族である」とあることから⁽²²⁾、2～3000人近い住民がいたことがうかがわれる。

居留区の住民は、どういう人々だったのだろうか。ジェルヴェーズが、「彼らのほとんどが極度の貧困に苦しんでいる、というのも、ここで生きていくために働くよりは飢えて死ぬ方を選ぶのだから」と記述している一方で、ド・ベーズは「シャムのポルトガル人は、かれらの貧困にもかかわらず、かれらの国民が名声を博しているということに誇りを持っていると豪語する」と述べており⁽²³⁾、ポルトガル居住区に住むポルトガル人が、貧しいながらも、「ポルトガル人」としてのアイデンティティを保ち続けていたことを強調している。前出のラ・ルベールの記述によれば、かれらは「インディア生まれのポルトガル人」であった。この「インディア」という言葉は、現在のインド地域を示すほか、喜望峰以東を漠然と指す言葉でもあるため、おそらくは生粋のポルトガル人というよりも、現地でポルトガル人が通婚してできた「アジア系ポルトガル人」であろうと思われる。オランダ東インド会社所属ファン・フリートは、「同地には現在ごく少数の一文無しのポルトガル人、ミスティセン [ポルトガル人とシラム人の混血児をさす：訳者注]、およびインドで新たにキリスト教徒になった人々が住んでいるだけである」と記述しており⁽²⁴⁾、また、王に仕えていたポルトガル人兵士について、「彼（シラム王）の兵士たちは主として従臣 [の臣民]、自国で生まれた人々、および外国人から成っている。外国人のなかではペゲー人がもっとも多く、その他に数は少ないが、イスラム教徒、ポルトガル人ミスティセン、マレー人およびその他の人々がいる」と述べており⁽²⁵⁾、ジェルヴェーズも、バンコクで要塞の守備に当たっていた「ポルトガル語でメスティーソとふつう呼ばれている」100人ほどのキリスト教徒について言及しているのだが⁽²⁶⁾、この「メスティーソ」という言葉は、「混血者」を指しており、シャムにいたポルトガル人の多くが、ポルトガル人とアジア系住民との混血者、あるいはその子孫であることがうかがえる。さらにこうしたポルトガル人の子孫に交じって、キリスト教に改宗したアジア系住民もいたことが、「インドで新たにキリスト教徒になった人々」という言葉からうかがえる。

（3）パリ海外宣教会の進出と「1688年の革命」

ポルトガル人居留区の形成とともに、1560年代には、マラッカから二名のドミニコ会士が到来し、教会の建設や布教活動を行う。その後、イエズス会、フランシスコ会の宣教師も到来して教会を形成し、現地における布教及びポルトガル人居留区住民の司牧活動に当たっていたのだが⁽²⁷⁾、17世紀に転機が訪れる。

アジアにおけるカトリック教会と布教活動は、15世紀以来、ポルトガル王権の「布教保

護権」下にあったのだが、ポルトガルは、オランダとの抗争に加えて、1640年にはスペインから「再独立」したことにより、スペインを支持する教皇庁と外交関係が断絶し（～1668年）、海外布教事業の担い手としての地位を著しく低下させていた。さらに、日本やヴェトナムでは、キリスト教に対する禁教政策や迫害が行われ、アジアにおけるキリスト教布教は停滞していた。さらに、現地人聖職者の養成に消極的であったことも、カトリック内部から批判の声が上がっていた⁽²⁸⁾。

こうした状況下、ローマ教皇庁は、1622年に「布教聖省 (Congregatio de Propaganda Fide)」を設置し、教皇庁主導の海外布教政策を開始する。この部局は、それまでポルトガルの布教保護権下におかれていた海外布教を、教皇庁を中心とした教会全体で取り組み、同時に、現地人聖職者を養成して、キリスト教共同体の存続を図るというねらいがあったとされている⁽²⁹⁾。1658年には、フランソワ・パリュがヘリオポリス名義司教およびトンキン（ヴェトナム北部）と南中国担当の教皇代牧、ピエール・ランベール・ド・ラ・モットがベルテウス名義司教およびコーチシナ（ヴェトナム南部）・南中国担当の教皇代牧、イグナス・コトレンディがメテロポリス名義司教および東中国・タルタリア・朝鮮担当の教皇代牧にそれぞれ選任され⁽³⁰⁾、アジアにおいてポルトガルの支配に入っていなかった地域におけるカトリック教会の統括と布教活動を任されることになる。そして、彼らを中心に、1659年、フランス王認可の下「パリ外国宣教会」が発足し、アジアへの布教活動が開始される。当初は、ヴェトナムや中国における布教活動を目的としていたかれらであったが、ヴェトナムにおける禁教政策などを目の当たりにし、キリスト教の信仰が認められていたシャムをターゲットに入れる。こうして、1660年にマルセイユを出発したランベール・ド・ラ・モットは、1662年にアユタヤに到着し、活動を開始する。かれは、シャム人への布教を試みる一方で、ポルトガル居留区のイエズス会士やドミニコ会士に対し、自らへの従属を要求したため、アユタヤのカトリック教会に軋轢をもたらすことになる。外国宣教会と教皇代牧の行動を布教保護権への挑戦であると受け取ったポルトガル・ゴアの教会当局は、アユタヤのポルトガル系聖職者に対し、教皇代牧への従属を拒否するよう指令し、アユタヤのカトリック教会はフランス系とポルトガル系の抗争の様相を帯びることになる。布教聖省と外国宣教会の活動により、シャムにおける教皇代牧の権限を認める一連の教皇勅書が発布されるとともに、1675年には、服従を拒否した聖職者に対するアユタヤ退去令も出されたことによって、この抗争は一応の決着を見る。結果として、ポルトガル人居留区の教会は、外国宣教会のフランス人司教に服属することになる。

こうした外国宣教会の活動と並行して、ルイ14世は、東南アジアへの進出を意図し、1672年には宣教師と使節を派遣する⁽³¹⁾。アユタヤ側では、ナーラーイ王（位1656～1688）と寵臣コンスタンス・フォールコンが、オランダに対する牽制を意図し、フランスとの接近を図り、外国宣教会に土地を与え、教会やセミナリオの建設を許可し、保護していた。ナーラーイ王の宮廷があったロップリーにおいては、かれらフランス人神父による天体観測所の建設も企図され、1685年には、アユタヤからフランス・教皇庁へシャム人使節が派遣され、通商条約も結ばれるなど、アユタヤ・フランス関係はかなり発展するものと思われた。

しかし、フランスはアユタヤ王の改宗を迫り、また、兵500を派遣するなど高圧的な態

度に出たため、シャム人から反感をもたれるようになる。そうした不満を持つ勢力を背景に、象部隊の司令官で王の乳母の息子であった実力者パートラーチャーが、王の重病を機に、1688年、フォールコンを肅清するなど政敵を排除、ナーラーイ王没後、王位につく。フランス兵とフランス人神父は囚われの身となり、なんとか解放されるものの、フランスとシャムの同盟構想は失敗に終わり、フランス勢力は撤退を余儀なくされた。もっとも、フランス人宣教師の活動はしばらくして許可されることになり、外国宣教会による布教活動が再開する。ヨーロッパ人には「革命」と表現されたこの事件を通じて、ポルトガル人居留区にはほとんど実害はもたらされなかったが、居留区の教会は外国宣教会系のシャム司教に服属したままであった。その一方で、ポルトガル系住民の中には、ゴアやマカオに対し、「ポルトガル人司祭」の派遣を要請するものもあり、フランス系聖職者になじめない「ポルトガル人」の存在を見て取ることが出来る⁽³²⁾。

その後も、アユタヤは交易都市として繁栄するが、ビルマに勃興したコンバウン朝（1752～1855）が侵攻し、1767年にアユタヤは陥落、ビルマ軍によって徹底的に破壊・略奪され、アユタヤ朝は滅亡する。この時、ポルトガル人居留区も破壊された。その後、ビルマに抵抗し、独立を回復したトンブリー朝タークシン王（位1767～82）、そしてラタナコーシン朝ラーマ1世（位1782～1809）の下で、都は現在のバンコクに移転する。かれらに協力したポルトガル系住民は、バンコクに居住地を与えられ、教会を建設する。すでにナーラーイ王期にポルトガル人コミュニティと教会が存在していたのだが（現コンセプション教会）、アユタヤから移住したキリスト教徒によってトンブリー地区にサンタ・クルス教会が建てられ、さらにそこから分かれたポルトガル系住民によってカルワル教会（ホーリー・ロザリー教会）が建てられ現在に至る⁽³³⁾。

おわりに—Luso-Asian Diaspora—

1511年のマラッカ攻略と前後して東南アジアに進出したポルトガル人は、拠点都市の枠を越え、商人、傭兵、宣教師として拡散して行く。当時国際交易で繁栄していた港市国家アユタヤにも、ポルトガル人傭兵・商人が到来し、国王から土地を与えられてポルトガル人居留区が形成される。3000人近く居住していたとされるこの居留区の住民の多くは、ポルトガル人とアジア人の混血者、そしてキリスト教に改宗したアジア人であったと考えられる。かれらのアイデンティティを構成していたものは、カトリック教会と「ポルトガル人意識」であった。ナーラーイ王期のフランス勢力の進出と外国宣教会による布教は、ポルトガル人というアイデンティティを浮き彫りにするとともに、アユタヤに、ポルトガル系教会とフランス系教会が距離を置いて併存するという風景を作り出す。

1767年のアユタヤ陥落後、生き残ったポルトガル人はバンコクに移り、居留区を形成して教会を建設する。今日、バンコクのチャオプラヤー川河畔に建つ教会は、同じカトリック教会でありながら、フランス系聖職者とは相容れない「ポルトガル人意識」を保ち続けたタイのポルトガル系住民の歴史を今に伝えている。このように、海洋帝国が衰退した後も残るポルトガル人の活動の足跡は、スブラフマニヤム言うところの‘Luso-Asian Diaspora’、すなわち、「アジア・ポルトガル人の離散」現象のひとつとして考えることができるだろう⁽³⁴⁾。



写真⑤コンセプション教会



写真⑥サンタ・クルス教会



写真⑦ホーリー・ロザリー教会

〔註〕

- (1) リンスホーテン、岩生成一・渋谷元則・中村孝志訳、『東方案内記』、大航海時代叢書Ⅷ、岩波書店、1968年、293頁。
- (2) 「交易拠点帝国」という表現は、合田昌史、「ポルトガルの歴史的歩み」、『スペイン・ポルトガル史』山川出版社、2000年。また、「海の帝国」という表現は、羽田正、『東インド会社とアジアの海』興亡の世界史15、講談社、2007年。
- (3) Boxer, C. R., *Portuguese Society in the Tropics, The Municipal Councils of Goa, Macao, Bahia, and Luanda, 1510-1800*, The University of Wisconsin Press, 1965. また、ポルトガル海洋帝国全体を扱ったものとして、Idem, *The Portuguese Seaborne Empire, 1415-1825*, Hutchinson, 1969.
- (3) Subrahmanyam, Sanjay, *The Portuguese Empire in Asia, 1500-1700: A Political and Economic History*, Longman, 1993. シヤムも含むベンガル湾世界におけるポルトガル人の活動については、Idem, *A Presença Portuguesa no Golfo de Bengala, 1500-1700, Comércio e Conflito*, Edições 70, 2002.
- (4) 東南アジアにおける「大交易の時代」と港市国家の発展については、桃木至朗、『歴

- 史世界としての東南アジア』、山川出版社、1996年。鈴木恒之、「東南アジアの港市国家」、『東アジア・東南アジア伝統社会の形成 16-18世紀』、岩波講座世界歴史13、岩波書店、1998年。弘末雅士、『東南アジアの建国神話』、山川出版社、2003年。同、『東南アジアの港市世界-地域社会の形成と世界秩序-』、岩波書店、2004年、を参照した。
- (5) アユタヤについては、石井米雄、『タイ近世史序説』、岩波書店、1999年、および、同、「後期アユタヤ」、『東南アジア近世の成立』、岩波講座東南アジア史 3、岩波書店、2001年、179頁～203頁。
 - (6) Russell-Wood, A. J. R., *The Portuguese Empire, 1415-1808, a World on the Move*, The Johns Hopkins University Press, 1998. また、東南アジアにおけるポルトガル人の活動については、生田滋、「東南アジアの大航海時代」、石井米雄編、『東南アジア近世の成立』、岩波講座東南アジア史 3、岩波書店、2001年、73頁～94頁
 - (7) 16世紀～17世紀の都市リスボンについては、França, José-Augusto, *Lisboa Pombalina e o Iluminismo*, Bertrand Editora, 1987, pp.17-58.
 - (8) ゴアについては、Souza, Teotónio R. de, *Goa Medieval, A Cidade e o Interior no Século XVII*, Editorial Estampa, 1994.
 - (9) Boxer, *Op. cit.* pp.52-56.
 - (10) Subrahmanyam, *Op. cit.* , pp.216-269.
 - (11) コンスタンス・フォールコンは、ギリシア生まれ。イギリス東インド会社に所属してシャムに渡った後、通商と語学に才覚を現し、ナーラーイ王に取り立てられ、商務と外交を担当、さらに権力を握る。かれはまた、アユタヤでカトリックに改宗し、日本系女性マリ・ギマールと結婚している。 Hutchinson, W. E. ,1688, *Revolution in Siam, The Memoir of Father de Bèze, s.j.*, Hong Kong University Press, 1968.
 - (12) ショワジ、「シャム王国旅日記」、ショワジ、タシャール、『シャム旅行記』、17・18世紀大旅行記叢書 7、岩波書店、1991年。
 - (13) Flores, Maria da Conceição, *Os Portugueses e o Sião no Século XVI*, I.N.C.S., 1995. 及び、Teixeira, Manoel, *Portugal na Tailândia*, Macau, 1983.
 - (14) アユタヤにおけるオランダ東インド会社については、フアン・フリート、生田滋訳、「シアン王国記」、『オランダ東インド会社と東南アジア』、大航海時代叢書（第Ⅱ期）、11、岩波書店、1993年、の訳者による解説を参考にした。
 - (15) La Loubère, Simon de, *The Kingdom of Siam*, Oxford University Press, 1969, p.112.
 - (16) アユタヤにおけるポルトガル人居留区の形成とバンコクへの移転については、Teixeira, *Op. cit.*, pp.63-91. および、チャーンウィット・カーセツシリ編集主幹、吉川利治訳、『アユタヤ』、タイ国トヨタ財団、人文社会科学教科書振興財団、2007年、163頁～170頁。
 - (17) Teixeira, *Op. cit.* , p.63.
 - (18) La Loubère, *Op. cit.* 所収の図版及び弘末、前掲書、34頁。

- (19) 日本人居留区（「アユタヤ日本人町」）には、徳川政権によるキリスト教弾圧の結果、日本系キリスト教徒が多数移り住んでいた。1626年から30年にかけて、日本人イエズス会士ロマン・ニシが布教活動を行っている。同じ頃、ペトロ岐部カスイも、アユタヤに滞在して日本への再入国の機をうかがっていた。H. チースリク監修、五野井隆史著、『ペトロ岐部カスイ』、大分県教育委員会、1997年、195頁～213頁。
- (20) Drans, Jean & Bernard, Henri (publié avec de notes), *Memoire du Père de Bèze sur la Vie de Constance Phaulkon, Premier Ministre du Roi de Siam, Phra Narai, et sa Triste Fin*, Tokyo, 1947, pp.50-51.
- (21) La Loubère, *Op.cit.*, p.112.
- (22) Gervaise, Nicolas, *The Natural and Political History of the Kingdom of Siam*, Bangkok, 1989, p.58.
- (23) Drans & Bernard, *Op.cit.*, p.57.
- (24) フリート、前掲書、154頁。
- (25) 同、123頁。
- (26) Gervaise, *Op.cit.*, p.49.
- (27) アユタヤにおけるポルトガル人宣教師の活動については、Flores, *Op.cit.*, pp.116-121. Teixeira, *Op.cit.*, pp.271-409. また、アユタヤを取り巻くカトリック教会の動きを概観したものとしてSmithies, M. & Bressan, L., *Siam and Vatican in the Seventeenth Century*, Bangkok, 2001, pp23-31. イエズス会とアユタヤの関係については、Cerutti, P., 'Tailandia', in *Diccionario Histórico de la Compañía de Jesús*, IV, Madrid, 2001, pp.3688-3691.
- (28) ポルトガルの布教保護権をめぐる問題については、Boxer, *Op.cit.*, pp.228-248. 及び、Lopes, M. de J. dos M. (Coordenação), *O Império Oriental, 1660-1820*, Tomo 2, Nova História da Expansão Portuguesa, V, Editorial Estampa, 2006, pp.81-85.
- (29) H. テュヘレ他著、上智大学中世思想研究所編訳／監修、『バロック時代のキリスト教』、キリスト教史6 [新装版]、講談社、1991年、116頁～128頁
- (30) Smithies & Bressan, *Op.cit.*, pp.26-27. なお、アユタヤにおけるフランス系聖職者とポルトガル系聖職者の抗争については、ド・ベーズに以下のような記述がある (Drans & Bernard, *Op.cit.*, p.53.)。

ゴア大司教ブランドン猊下は、1672年、ポルトガル王の世俗権のうちにはないすべての地域において、いかなる霊的権能をも主張しないことを宣言したが、そのことによって、トンキンとコーチシナのイエズス会士は、ただちに（代牧の権威に）服従することになった。その一方で、大司教は、すでに私（ド・ベーズ）が述べたような理由で、ポルトガルの支配に入っているものとして、シャムにおけるポルトガル人居留区については留保していたが、そのことによって、居留区にいた神父たちは、教皇が裁定を下すまで、代牧に服従すべきであるとは考えなかった。・・・その一方で、執拗に迫られた神父たちは、代牧の権威に服するよ

う強いられ、そして常に破門寸前であった。

ゴアやマカオといったポルトガルが実効支配し拠点を形成している地域に関しては、従来どおりポルトガル国王の布教保護権が有効であるが、ポルトガルが実効支配していたわけではなく、現地権力の認可の下で居留区を形成し、カトリック信仰が許されていたアユタヤは、ド・ラ・モットら代牧にとって、自らの権限を拡大する上で、「魅力的な」場所であった。1662年にアユタヤに乗り込んだ外国宣教会は、その後出された教皇勅書によって、シャムにおける自らの権限を後付けで正当化し、アユタヤにおけるカトリック教会の指導権を手中にする。

- (31) アユタヤとフランスの関係の進展、及び「1688年の革命」については、石井米雄、前掲書、188頁～196頁。
- (32) フランス系司教への従属が確定した後も、ポルトガル系住民は19世紀初頭まで、ゴアやマカオに対し、ポルトガル系聖職者の派遣を要請している。Teixeira, *Op.cit.*, pp.333-335.
- (33) ラーマ1世期のバンコクにおけるカトリック教会については、友杉孝、「都市景観の形成」、田坂敏雄（監修）、『アジアの大都市 [1] バンコク』、日本評論社、1998年、45頁～72頁。また、タイにおけるキリスト教の歩みを概観したものとして、石井米雄、「タイ（シャム）におけるキリスト教」、寺田勇文編、『東南アジアのキリスト教』、めこん、2002年。
- (34) Subrahmanyam, *Op.cit.*, pp.267-269.

図版出典

図①：Russell-Wood, A. J. R., *Op.cit.* 所収の図より作成

図②：Dias, Marina Tavares, *Lisboa Desaparecida*, Quimera, 1987.口絵

図③：リンスホーテン、前掲書、284頁

図④：弘末雅士、前掲書、34頁。

写真①～⑦：撮影 疇谷憲洋（2008年9月、於タイ国）。

（付記）本稿は、科学研究費・基盤研究（A）「近代移行期の港市における奴隷・移住者・混血者—広域社会秩序と地域秩序—」（研究代表弘末雅士）による研究成果の一部である。